

自分の中のディズニーランド

永田円了



Disneyland Inside of You

「たかが遊園地」という考えは捨てねばならない。開園1年で1千万人を集めた東京ディズニーランド。ミッキーマウスたちに目を輝かせる人々の意識には、それまでとは違う潮流が感じられる。

かつて、高度成長時代、人々はものをモノとして楽しんだ。洗濯機、冷蔵庫、自家用車……。社会の欲望はモノに執着し、幸せな気分はモノを手にすることで感じることができると思った。

しかし、それで本当にハッピーな気分になったのだろうか。人々はやがて、モノが与えてくれるのはたんなる便利さだけで、幸福感でないことに気づき始める。便利さや効率性は必要だが、それがどうした……。どこかに幸福感や夢心地を売っているところはないのか。少しぐらいお金がかかってもいい……。

夢（虚）を売るディズニーランド

ディズニーランドは徹底して夢を売るテーマパークである。来園者に非日常を体験してもらうために、幾多の工夫が施されている。夢を支える従業員はキャスト、来園者はゲストと呼ばれ、日常を感じさせるものなど、現実を見せない工夫がされている。では、レストランに運び込む飲食料品などはどうしているのだろうか。食料品などは通常、閉園時間中に運び入れられるが、ジュース類やアイスクリームなどは、開園中にも搬入が必要になる。コカ・コーラのトラックが開園中に園内を走り回れば、せつかくの夢の気分も覚めてしまう。

現実を見せない工夫は、地下トンネルの設置であった。ディズニーランドの地下には、トンネルが網の目のように張り巡らされ、そこからゲストには気づかれず、様々な資材を園内のど真ん中に運び込めるわけだ。地上での夢を、地下の現実が支えているということである。



虚が実をエンパワーする



ディズニーランドでは、夢の国をドリームランドではなく、「ファンタジーランド」と名付ける。ドリームとは、現実に叶うこと。ファンタジーは、不可能な夢の世界。英語で“If I were a bird……”で表す「反実仮想」である。人間は鳥にはなれない。でもなりたい。これを可能にする劇場がディズニーランド（フィクションの世界）だ。

劇作家・寺山修司は「現実をイリュージョンによってくつがえす」と述べ、演劇の必要性を説いた。また玉三郎は、自らを鷺（さぎ）として演じ（鷺娘）、そのフィクションによって女性の情念をみごとに表現した。生身の人間（実）として表すより、虚の中で真実を表わすことの方が、心の琴線に触れるという美学が生まれたのである。

私事ながら、十代の学生時代に私の人生を変えた映画がある。ダスティン・ホフマン主演の米映画『卒業』（1968年上映、アカデミー賞受賞作）、この映画（フィクション）が存在しなかったら、留学もなかった。その後展開して今に至る自分はなかったと言えるのではないか。フィクション（虚）の力、恐るべし。

<事 例>

ウォルト・ディズニーの素顔／心に闇をもっていた
虚が実をエンパワー／虚を演じるコロック、その人の元型を見せる
反実仮想を語る、磯田道史／サワコの朝より
永田円了／朝日新聞コラムより／「If のカ身体に満つ」
寺山修司／劇作家／現実をイリュージョンによってくつがえす
高倉健／お墓参りシーン、手を合わせる健さんに心ひかれる
米映画『卒業』The Graduate のラストシーン、闇と光
松本清張と帝銀事件／フィクション vs. ノンフィクション
渡辺 謙／虚業の中の真実／虚の中で実が光る
玉三郎／虚の世界で、真実を表現する、鷺娘等
Eテレ『漁師と妻とピアノ』フィクションがこの漁師の人生を変えた
歌・クミコ「人生のメリーゴーランド」

円了のホームページ: www.enryo.jp

